



ドイツ式省エネ普及の背景探る

NPO外断熱会議ら
温暖化防止セミナー

NPO（非営利組織）法人外断熱推進会議と外断熱懇話会は、東京・芝公園の機械振興会館で、セミナー「外断熱による地球温暖化防止と長期耐用住宅」を開いた。

ドイツW D V S（湿式

外断熱）協会のウォルフガング・ゼツラー専務理事が「地球環境への大いなる貢献—W D V S 50年の軌跡—」、田中辰明お茶の水女子大名誉教授が「日本における湿式外断熱」、タカネヒューマンサポートの田代育夫専務が「暖房設備のいろいろな介護サービス施設」、シヨック社のルイス・ベゴツ氏が「ヒートブリッジ対策の重要性」と題してそれぞれ講演した。

ゼツラー専務理事は、ドイツにおいて外断熱建築（改修を含む）が1973年以降急速に普及した背景として、省エネルギー消費は灯油換算

で2500億円が削減され、さらに二酸化炭素（CO₂）排出量は6億7000万トンが削減され、外断熱が地球環境に大きく貢献している。エネルギー消費量削減は金額にすると1500億円の節約になり、経済的なメリットも大きい」と説明し、外断熱建築が地球温暖化防止に貢献していることを強調した。

から現在までにドイツ国内で建設（改修を含む）された外断熱建築は7億6000万平方メートルに及び、これにより建物のエネルギー消費は灯油換算